４．グループ取組み（月１回　環境新聞発行）

暁　環境新聞

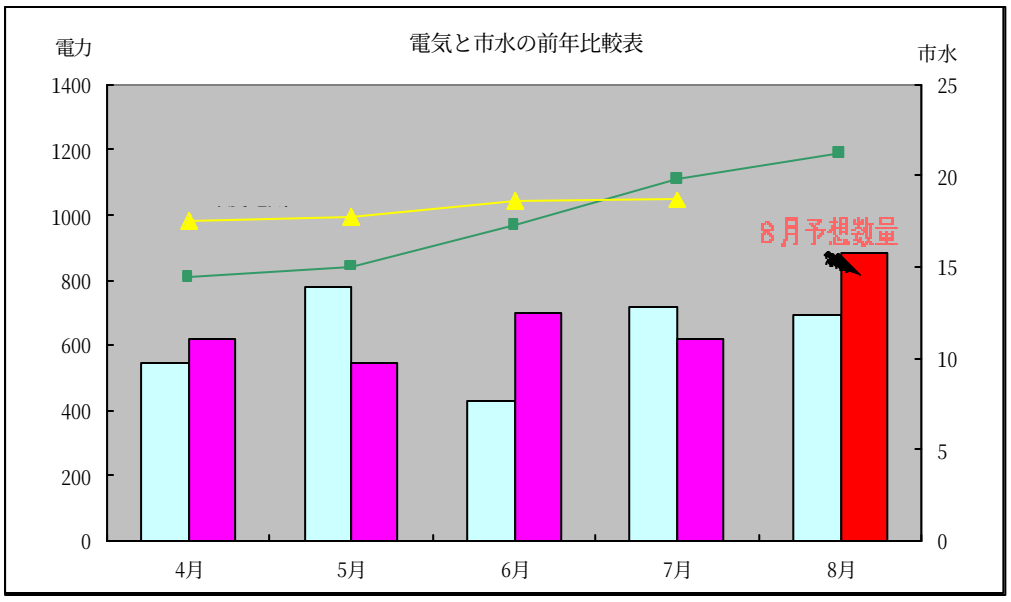
第１０号

2002年８月

作成

承認

市水85トン流出事故を考える



やっと梅雨が明けたと思ったら、照りつける暑さの続く今年の夏。やはりこれも地球温暖化の影響でしょうか？。

エアコンの売り上げは昨年同月の１２０％増で、その分電気使用量もうなぎ登りに増えています。

当社では、生産量の増加に伴い、残業や休日出勤などにより電気使用量は昨年に比べ増加しています。（左図参照）

一方市水は、前年に比べほぼ横這いに推移していたのですが、８月初旬に屋上から市水が流れ出ていたのにもかかわらず、そのままの状態で約２日間放置されていたため、当社の一ヶ月分の使用量の一割に匹敵する量がムダになってしまいました。

今回は、この事故に関して考えてみようと思います。

8月3日事故発生

今回の市水流出事故は、８月３日（土）の夕方発生しました。

工場の屋根上から流れる水に誰もが気付きながらも、**以前同じようにチラー停止時の水が流れていて問題がなかったため「大丈夫」と判断**。翌４日（日）の出勤者も異常と気づかず翌５日（月）の朝まで、流れっぱなしになっていました。この間流れ出た水の量８５ﾄﾝ。当社の約一ヶ月分の市水使用量の１／１０とほぼ同じ量で、一般家庭のお風呂に換算すれば４２５杯分、一年分以上の量になります。

そもそも今回、市水がなぜ８５ﾄﾝも流れ出てしまったのか？それは屋上に設置されているクーリングタワーのフロートの故障によるものでした。

本来、槽の中に取り付けられているフロートは、水位によって浮き沈みし、満水の状態になるとフロートが弁を調整して水の投入を止める働きをします。しかし今回はフロートが引っ掛かってしまい、満水になっても水の投入が止まらず溢れ出てしまったのです。

事故後、**オーバーフロー配管の位置を変更し、今後は屋上から流れ落ちることはなくなりました。もし流れ落ちていれば、全て異常事態と判断してください。**

今回の事故に関しては、８月の安全・環境推進委員会でも話しあわれました。８５ﾄﾝという多量の市水を、使うことなく流してしまった最大の原因は、水が屋上から流れ出ている状況を何人もの人が確認していながら「異常ではない。大丈夫だ」という根拠のない自己判断をしてしまったことによる、という意見が大勢をでした。

また、**小さなことでも、いつもと状況が違う時は上司に報告することが必要**だ、という意見もありました。

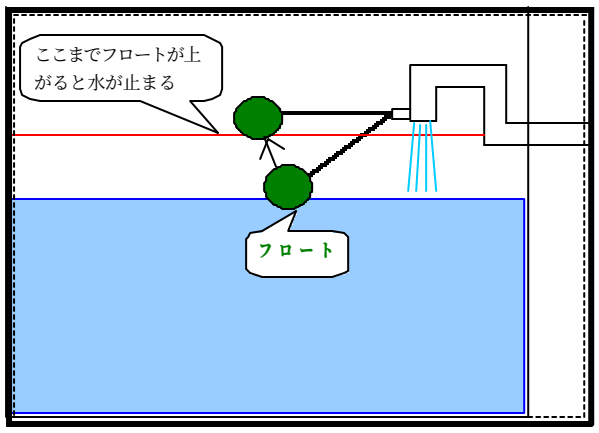
各工程においても、今回の事故を教訓にいろいろな話し合いが行われたようです。

ネオセラム加工グループは、事故発生現場であるクーリングタワーに加工者全員で状況確認をしに行かれました。

管ガラス加工グループでは、「５分以上出っ放しであれば異常事態。点検時以外は流出はない」ということを確認し合い、上司に報告するよう現場担当者全員で話しあわれました。

また、報告を受ける側の上司も、報告状況だけで判断せず、実際の状況を見て判断することが必要です。

今回は、市水の流出事故でしたが、今後どのような事故が発生しても今回同様、自己判断はせず、まずは状況を確認することが重要ではないでしょうか。



クーリングタワー内の様子

屋上に設置されているクーリングタワー

編集後記

「猛暑」と言われる今年の夏。暑い時には食べ物の保存にも気をつかいますね。作ったものがすぐに痛みやすかったり、場合によっては食中毒につながったりする為、この季節は何でもかんでも冷蔵庫に入れて一杯と言う状態の方も多いのではないでしょうか？

さて、食べ物といえば、ほとんどの食品に「消費期限」か「賞味期限」が明記されていますが、この２つの違いをご存じですか？

「消費期限」はおおむね５日以内の期間で品質が劣化する食品につけられる安全に食べられる期限であり、「賞味期限」は品質の劣化が比較的ゆるやかな食品につけられるおいしく食べられる期限です。

大半の方が、お店で食品を買うときこの２つの期限を見て買われると思うのですが、今日か明日必ず食べる物でも１日でも期限が長いものを選んで買っていませんか？

環境に厳しいヨーロッパでは、今日や明日食べることが分かっているものはその期限内のものを買い、期限切れで産廃として廃棄する食品を少しでも出さないよう消費者一人ひとりが意識し、行動してるそうです。

環境の基本は、廃棄物を作らない。そのためにやみくもに期限の長いものを選ぶのではなく、すぐ食べる物はその期限内のものを選ぶ。そんなヨーロッパの人たちの姿勢を私達も見習いたいものですね。

井上